

強者の戦略

【朝晩すごしやすくなりましたね】

こんにちは、北林です。少しずつ秋の気配が近づいてきたようです。朝晩が過ごしやすくなりました。でも体調管理には気をつけてください。睡眠時間もちゃんととってくださいね。これから私はきっと食べ過ぎる季節になります。

さて、解答作成へのワンポイントアドバイスです。改めて問題の確認です。

京都大学 2016年 第3問

18世紀のヨーロッパでは、理性を重視し、古い権威や偏見を批判する啓蒙思想が有力となった。イギリスとプロイセンの場合を比較しながら、啓蒙思想がどのような人々によって受容され、また、そのことがどのような影響を政治や社会に及ぼしたか、300字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。

難しかったでしょうか。用語を覚えておけば何とかなるという問題ではありません。やはり正しい理解が必要な問題だと思います。

啓蒙思想と言えば、フランス革命などの市民革命に影響を与えたことを思い出すでしょう。一方、東欧では市民革命はおこらず、啓蒙思想を知っている絶対君主である啓蒙専制君主が現れます。これらはヨーロッパ東西の社会の違いが背景にありますね。では、そうした背景を少しお話ししてみたいと思います。

強者の戦略

《ワンポイントアドバイス》

問題の解法の前に、まずはヨーロッパ東西の社会の違いについて簡単に触れておきたいと思います。大航海時代になると、ヨーロッパの国際分業体制ができます。わかりますか？16世紀には西欧は大航海時代を迎えて商工業が発達します。一方東欧では再び農奴制が強化されて行きます。これを再版農奴制といいます。ドイツの農場領主制はグーツヘルシャフトといいましたね。東欧は穀物を西欧に輸出する地域となります。西は商工業の盛んな地域、東は農業の盛んな地域、と分業体制が生まれることになるのです。

絶対王政の時代が進んでいくと、西欧の絶対王政では経済政策として重商主義が行われていきます。東欧ではそれがあまり発達しません。西欧では市民階級が成長していきます。市民、という言葉は時代によっていろんな考え方があるのですが、ここでの市民階級はブルジョワと考えていいでしょう。一方東欧では市民階級は未発達でした。政治を支えていくのもユンカーと言われる土地貴族です。

18世紀にイギリスで啓蒙思想が生まれましたが、特にフランスで発達します。当時のフランスは絶対王政が非常に強く、またアンシャン＝レジーム(旧制度)という社会の体制で、いわば身分制度がちがちの状態。だから啓蒙思想家が何人も現れ、啓蒙思想が市民革命を後押しすることになっていきます。一番過激だと考えられたルソーの影響はかなり強かったと思われます。

ドイツやロシアなどにも啓蒙思想は伝わりました。しかし人口の多くを農奴が占め、市民階級が未発達なため、啓蒙思想が市民革命のような「下から」の動きには繋がりません。啓蒙思想を知っておきながら国の改革を「上から」改革する、啓蒙専制君主が現れます。結局絶対王政を強化していくことになります。

ここまで、東欧と西欧の違い、おおまかにですが解説しました。思い浮かべられたでしょうか。

では解答への簡単なアドバイスをしていきます。

西欧では市民階級が発達し、フランスでは革命になっていきました。ところが今回の間はフランスではなくイギリス。イギリスの当時の政治・社会はというと…すでに2回革命をやっているんですね(イギリス市民革命…清教徒革命&名誉革命)。もう立憲君主政が成立しています。啓蒙思想は市民階級が受容するものの、市民階級が一定の力を持っているので、議会政治が確立していく、という感じでイギリスの場合は啓蒙思想が政治体制を激変させるような市民革命には繋がりません。革命に繋がったフランスに比べたら啓蒙思想そのものが穏やかなものだったといえるでしょう。イギリスは18世紀後半から産業革命を迎えますが、その後の経済学や社会を支える思想になっていきます。

プロイセンは、まだ市民階級が未発達であり、プロイセンでは若い頃から西欧の文化に造詣の深かったフリードリヒ2世が、啓蒙思想を取り入れ改革を行います。ヴォルテールと文通するなど交流を持ち、自らも『反マキャベリ論』を書くなどしているわけですから、かなり啓蒙思想について詳しくあったと思われます(ちなみにフリードリヒとヴォルテールは直接会うことになりましたが、数日で険悪な仲になったそうです(笑))。しかし時代は絶対王政。国を強くしないとやられてしまいます。結局「上からの」改革を行うことになるのです(1994年の京都大学の問題が啓蒙専制君主の問題です)。

強者の戦略

《解答例》

17世紀に二度の革命を経験したイギリスでは、啓蒙思想は市民階級を中心に受容された。政治面ではハノーヴァー朝のもとで責任内閣制が成立し、議会政治の基礎が確立された。また社会面では市民階級の自由放任主義的な経済思想をアダム＝スミスが確立し、産業革命を支える思想的背景となった。市民社会が未成熟であったプロイセンでは国王フリードリヒ2世によって受容され、彼は啓蒙専制君主と称された。政治面では富国強兵を目指して軍制・官僚制の整備などが行われ、中央集権化を進めた。また社会面では農民保護や商工業育成、宗教的寛容などの改革を進めたが、あくまでもそれは「上からの改革」であり、封建的支配を否定するには至らなかった。(300字)